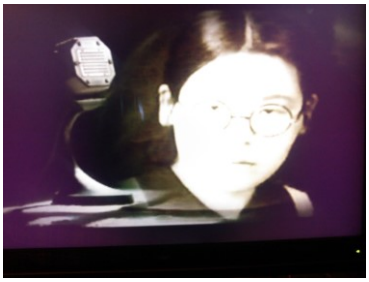
日中戦争の現場で反戦放送　日本女性・長谷川テル



ただいまから重慶放送局の日本軍向け放送を致します。

日本の将兵のみなさん！どこでこの放送をお聴きでしょうか。戦争はいかなる時でも不幸なものです。あなたの撃った砲弾や銃弾はたくさんの子供たちの命を奪っています。でもそれはあなたたちが悪いのでしょうか。みなさんはこの戦争は聖戦だと教え込まれ、そう信じているかもしれませんが、はたしてそうでしょうか。ちがいます。この戦争は、大資本家と軍部の野合(やごう)世帯(じょたい)である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなた方のご家族は、皆さんのご無事を祈り、一日も早く平和が訪れることを望んでおります。

日本の将兵のみなさん！皆さんの熱い血を、あやまって流さないでください。みなさんの敵は海を隔てたこの地にはいないのです！　お元気で　どうか　どうか　生き抜いてください。

広東でも放送は聞かれていた 強力な電波
だったのだろう 韓国から名門中山大学に
学んだ安偶生 エスペランチストとして 後
に韓国に戻り エルピン名で活躍 安重根の
甥

いまあなたはマイクのまえに立って
あなたの同胞に真実をつたえる
あなたの声はおだやかではあるが
雷鳴を呼びおこす力がある
健全な良心をうしなわない魂に
あなたは言葉をささげる
あなたの声は、空しくはならぬ
血に酔いしれた心を
その声はかならずひきさき
なやませるであろうから

広州　中山大学学生　安偶生

宮西さんだけでなく 戦後 復員兵の間
で大きな話題に

まづ童謡が 聞こえ
　重慶放送は
妨害電波 しきりなる夜を
長沙作戦 軍の動きを
　つぶさに伝う
重慶放送に 耳傾ける
鼻にかかった 女の声す
　重慶放送
いかなる過去を
　もちたる人や
重慶放送 その流暢な
　日本語を
ひそかに聞きて
　おだやかならず

中支派遣軍　通信兵　宮西直輝

長谷川テルの生涯

出生・少女・自立へ　(1912-1937 年)

1912 年３月７日　山梨県現大月市で父母　幸之助 よねの次女として出生
1924 年　東京府立第３高等女学校入学
1929 年　17 歳　奈良女子高等師範学校に入学　寮生活
1932 年　20 歳　長戸恭とともにエスペラントを学ぶ　奈良の文化団体・労組・農民運動 ともエスペラントを介して交流
９ 月 新学期早々治安維持法違反容疑で長戸と共に検挙　退学を余儀なくされる。卒業まで半年のことだった　帰京　日本プロレタリア世界語者同盟に加入
1933 年　小林多喜二『蟹工船』をエスペラントに抄訳
1935 年　上海のエスペラント協会『ラ・モンド』に「日本婦人の状況」掲載
1936 年　24 歳　エスペラントを通して交際を深めた東京高等師範学校中国人留学生劉仁と結婚　父は猛反対　母と姉ユキが祝福
1937 年 4 月 14 日　日本の中国全土への侵略拡大を憂い　救国の意思を胸に帰国した夫劉仁を追って横浜港を立つ　上海で劉仁と合流　上海のエスペランチスト葉籟士　張企程と邂逅　直ちにエスペラント誌『中国は吼える』で反戦執筆活動に入る

日中戦争下反戦活動・反戦放送に従事　(1937-45 年)

1937 年７月　盧溝橋事件により　日本軍日中戦争に突入
８月第二次上海事変で上海を爆撃　12 月日本軍南京大虐殺　テル夫妻広東に脱出
1938 年２月　26 歳　広東で長谷川テル国外追放　テルとともに劉仁も香港に脱出　郭沫若やエスペランチストの援助のもとに武漢に向かう
６月武漢到着　テルの反戦放送開始　９月武漢陥落直前に移転首都重慶に向かう
11 月 1 日東京の『都新聞』「嬌声売国奴の正体はこれ　怪放送祖国へ毒づく」の見出しで　テルの反戦放送を実名入りで報道　12 月　テル夫妻重慶に到着
1939 年　日本軍重慶無差別爆撃開始　国際宣伝処所属　反戦放送に従事しつつ　エスペラント誌『中国報導』で全世界に日本軍の蛮行と中国の抗戦および平和と人類正義への願いを発信
1941 年 29 歳　７月「重慶文化人大会」で中国共産党重慶代表・周恩来がテルに向かって　「日本帝国主義者はあなたを売国奴アナウンサーなどと言っていますが　実際は

あなたは日本人民の忠実な娘であり　あなたこそ日本の真の愛国者なのです」と称賛　この年長男劉星を出産

1942 年 30 歳　テルが愛してやまず　詩「二つの失われたリンゴ」を捧げた母よね逝去　それをテルは知る由もなかった

1943 年　『闘う中国で』執筆開始　中国共産党機関紙『新華日報』にも文章を寄せる

1944 年　夫劉仁が編集長を務める「東北民衆抗日救国総会」の雑誌『反抗』で　編集の任に当たる　抗日戦争戦局好転につれ　国民党の妨害きびしくなる

1945 年 33 歳　『闘う中国で』５月出版　ついに８月 15 日日本敗戦　たいまつ行列に参加　９月 11 日『新華日報』にテル「岐路に立つ日本」を執筆　「日中戦争の失敗を全く認めない」降伏文書を批判　日本が再び歩みかねない危険な道について警告を発した　国民党による内戦への動きを食い止め　東北満州の復興に参画するようという周恩来の要請に従い東北に向かう

重慶から東北最果ての地への旅路 (1946-47 年)

1946 年 34 歳　幼い劉星を連れた延べ１万 2000 キロの長旅が始まる　重慶から武漢　武漢から上海　上海では息子劉星が国民党特務により誘拐され　取り戻すという事件にも遭遇　２月上海から船で北上　瀋陽で長女暁子（劉暁嵐）出産　ハルピン　から佳木斯へ　列車　汽船　馬車　徒歩　軍用トラック　病身には過酷な旅であった

1947 年１月　劉仁・テル夫妻は東北社会研究所研究員に任命される　１月 10 日３人目懐胎を知ったテルは　激化する内戦のもとでの自身の病弱と仕事と育児を考え　中絶を決意したが　術中の感染症で逝去（34 歳）。最後の言葉「日本に帰りたい・・お母さん・・」であった 夫劉仁はテルの埋葬を一時拒絶　４月に逝去（37 歳）重慶でともに活動した「東北民衆抗日救国総会」指導者高崇民は　東北解放後東北行政委員会副主席となり　テル夫妻の埋葬地を探し出し　テル夫妻の現在に至る墓碑を建立　劉星は叔父のもとへ　暁子は烈士子女の待遇でハルピンの幹部子弟孤児院に引き取られた　劉仁の弟劉介庸からテルの死を知らされたエスペランチスト由比忠之進（67 年アメリカのベトナム侵略戦争に加担する日本政府に抗議して焼身自殺）が 48 年帰国　テル死去の報を日本にもたらした